

(資料1)

日本陶磁器センター旧館、日本陶磁器センター新館

(にほんとうじきせんたーきゅうかん、にほんとうじきせんたーしんかん)

員数：2件

所在地：名古屋市東区代官町 3903

所有者：一般財団法人日本陶業連盟

1 登録理由

旧館

名古屋市東区に所在し、新館の北側に位置する。陶磁器製品を扱う団体のオフィスビルで、内外にタイル等の陶磁器が多く使用されている。

(登録基準：造形の規範となっているもの)

新館

旧館の南側に位置し、通りに面して建つ。ガラス面を広くとったモダニズムデザインの特徴をとらえた建築となっている。

(登録基準：造形の規範となっているもの)

2 概要

旧館

鉄筋コンクリート造3階一部4階地下1階建、煙突付、建築面積 291 m²、

建設年代 昭和9年／昭和32年移築

新館

鉄骨鉄筋コンクリート造5階地下1階建、建築面積 306 m²、建設年代 昭和33年

旧館は、昭和9年、日本陶磁器工業組合連合会共同販売所として造られ、戦前の輸出陶磁器製品の品質の確保、生産調整を行う場となっていた。

階段広場や廊下の内装は、幅木がトラバーチン¹、床と腰壁がタイル張、漆喰塗の上部壁との見切りをトラバーチンとしている。

大会議室の床は寄木板張、腰壁は板張、上部壁は漆喰塗、天井は浅い蒲鉾形天井で、北側正面には壁面装飾とアルコーブ²がある。戦後の輸出陶磁器に関する2国間貿易交渉

¹トラバーチン：緻密・硬質で縞（しま）状構造をもつ石灰岩。水に溶けている炭酸カルシウムが沈殿してできたもの。装飾用石材にする。イタリア産のものが有名。

²アルコーブ：部屋や廊下などの壁面の凹所。ベッドなどが置かれる大きなものから花瓶などを飾るようなものまでがある。語源はアーチを意味するアラビア語。 17

の会場となった大会議室は見所である。

新館は、日本陶磁器意匠センタービルとして造られた。横長の茶系タイル張で、ガラス面を広く取った横長の連窓で水平が強調されている。1階玄関ホールと階段周りは、円弧を描く軽快な階段と開口部の少ない壁面という対比的デザインとしている。

全体的に軽快で均整がとれ、抑制が効いた、戦後モダニズム建築³となっている。

世紀のフランス建築では、貴婦人の供応の間として大規模、豪華に造られる。
³モダニズム建築：20世紀になって発生した、装飾性を廃し、合理性、機能性を可能な限り追求した建築様式のこと。



旧館北面（名古屋市教育委員会提供）



旧館西面（名古屋市教育委員会提供）



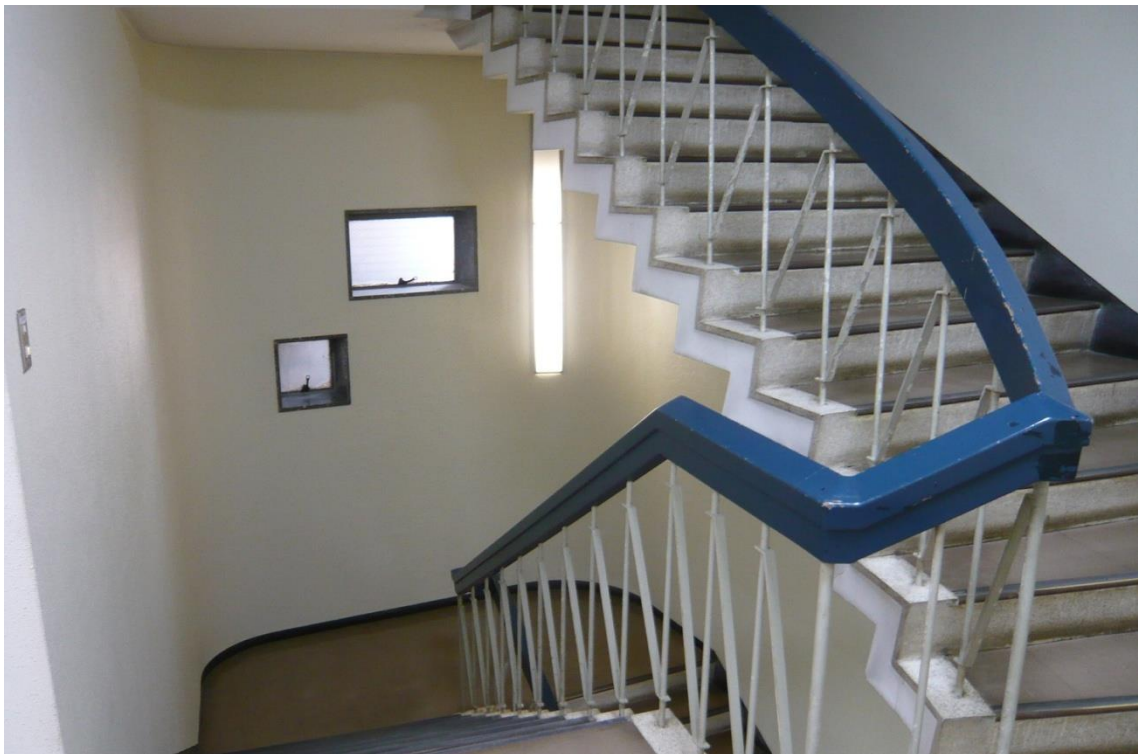
旧館 1 階廊下 (名古屋市教育委員会提供)



旧館 3 階大会議室 (名古屋市教育委員会提供)



新館南面（名古屋市教育委員会提供）



新館階段まわり（名古屋市教育委員会提供）



新館4階多目的ホール（名古屋市教育委員会提供）